

# 親和会誌



2023  
〈復刊83号〉

# 親和會

## 親和会員の皆様へ

本誌は、創刊以来冊子版を送付していましたが、このたび、フルカラー PDF 版を同時発行する運びとなりました。PDF 版は、ホームページ (<https://acebe.yz.yamagata-u.ac.jp/about/shinnakai/>) より閲覧できます。

次号より、冊子送付をとりやめても良いという会員の皆様に、切り換え方法をご案内します。件名に「親和会誌 PDF 版希望」、本文に「卒業年度 (コース)、氏名、E メールアドレス」をお書きのうえ、親和会事務局 (acebe@yz.yamagata-u.ac.jp) へ E メールを送って下さい。次号より、PDF 版発刊を E メールでお知らせします。

連絡がない場合は、従来通り冊子版を送付いたしますが、諸経費高騰のおり、PDF 版への切り換えに協力頂ければ幸甚に存じます。

# 目 次

## 巻頭言

親和会誌復刊83号の発刊によせて

化学・バイオ工学分野 教授 落合 文吾 1

## 退職にあたって

定年を迎えて

化学・バイオ工学分野 准教授 佐藤 力哉 3

退職のお知らせ

技術部 統括技術長 大竹 哲也 6

## 退職によせて

ご退職に際して感謝申し上げます

化学・バイオ工学分野 教授 木島 龍朗 8

## 新任教員のあいさつ

システム創成工学科 准教授 ガリボン ジョゼフィーヌ 10

佐藤力哉 准教授 退職のお知らせ 12

大竹哲也 統括技術長 退職のお知らせ 13

会計報告・会費納入者芳名 14

高原だより・編集後記 16



## 親和会誌復刊83号の発刊によせて

化学・バイオ工学分野 教授 落合 文吾

この親和会誌復刊83号の巻頭言を書いておりますのは、2024年1月13日、大学共通テストの初日です。例年の1月上旬でしたら、米沢キャンパス前の道には両脇に雪壁がせり立っており、試験の数日前にそれが取り払われて、久々に歩道から反対の歩道が見渡せるようになったのを小さく喜ぶところです。この冬は、地球沸騰化と言われた2023年の尾を引いた暖冬で（とは言っても相変わらず寒いのですが）、雪は道路にはほとんど見当たりません。遠くに見える天元台のスキー場あたりも、ゲレンデは白いものの、周りにはあまり雪は多くなさそうです。試験当日の今日も、雪はちらつく程度となっており、受験生が滑らないように外担当の職員の方々が雪かきをすることもなかったかと思えます。このまま雪があまり降らないよう期待しつつも、あまり降らないのも米沢らしくなくてつまらないなと思ってしまうのは、20年の米沢暮らしが板に付いてきたところかもしれません。

2023年度は、工学部におけるコロナウイルス感染症に関する様々な規制がほぼ無くなり、概ね通常に戻った形で教育、研究活動が行われています。一方、コロナ対策で広がったオンラインでの会議や講義は一定レベルで続いており、良い影響も感じるところです。私が担当している講義は、大学院のものが完全オンラインのみ、学部のもは基本的に対面とオンライン併用のハイブリッドとしております。大学院の講義は全専攻を対象としたテクニカルライティングであり、米沢のみでなく、小白川と鶴岡の学生も受講しています。分野が幅広いだけに困難もありますが、バックグラウンドが異なる学生たちが時に意見を寄せ合うような形態の講義ができるようになるとはコロナ禍前には思いもよりませんでした。学部のハイブリッドでの講義は、最初の方は対面で出席する学生が多いのですが（7～8割位でしょうか）、日々オンラインの方にシフトする学生が増えてきます。余るプリントが増えていき、毎週印刷枚数を減らしていきませんが、足りないと困りますので、結局一定量の紙を無駄にしてしまうのに少し心を痛めます。最後の週には、対面／オンライン率は逆転に近くなっていることが多い印象です。よくオンラインだと聞いているのかわか

らない、などという声を聞きますが、学生時代に教室にいても寝ているか他のことをしているかで授業はろくに聞いていなかった自分を鑑みると、まあ教室でもオンラインでも聞く人は聞くし、聞かない人は聞かないので、どちらでも良いのではないかと思っております。ただ、以前に研究室に入った学生から、「先生の講義の時に、Zoom繋いで山形までラーメンを食いに行っていました」と聞かされたときには、たしかに対面の講義中にラーメンは食えないな、とは思いました。一方、体調が悪いときでもなんとか講義を受けられたという声もちょこちょこ聞きますので、これからもあまり悪用されないのを祈りつつ、ハイブリッドでの講義を続けていこうかと思っております。これから数年で、またより優れた技術が出てきたりするのかもしれない。

このように色々と変化が続くこの数年ですが、この一年の化学・バイオ工学科、化学・バイオ工学専攻の雰囲気や、この親和会誌を通じて皆様に少し読み取っていただけたら幸いです。



### 定年を迎えて

理工学研究科 化学・バイオ工学分野

准教授 佐藤 力哉

気がついたらあと数ヶ月でこの職場を離れることになりました。親和会から退職にあたっての原稿をお願いされ、親和会会員になって日が浅いので何を書こうかと考えていたのですが、折角機会を与えていただきましたので、工学部に奉職してからのことについて少し書かせていただきます。

私が初めて米沢に来たのが38年前になります。就職するにあたって米沢の雪を一度見に来てと、後にお世話になる武石先生からお話をいただき3月初旬に工学部を初めて訪問しました。まず驚かされたのが、電車(まだ山形新幹線が通じていなかったため福島から特急電車を利用)を降りて目にしたスキー場でみるような大雪です。駅からタクシーを使って正門前来到ると、武石先生自ら長靴を持ってお迎えに来てくださりとても恐縮したことを覚えております。4月からお世話になったのが高分子化学科(現在の高分子・有機材料工学科)です。当時は現在の研究室制と異なり教授・助教授・助手・技官の4名からなる講座制を取っており、私が所属した第2講座では、教授に武石先生、助教授に上田先生(後に東工大教授 現山形大学客員教授)、技官に加藤さんがおられました。実験面では、武石先生の研究である高分子触媒や上田先生のレジスト材料開発のお手伝いをさせていただきましたが、私がまだ高分子の取り扱いに不慣れなこともあるという武石先生のご配慮から、高分子関連の講義をいくつか特別に聴講させていただきました。当時、高分子系には元学長の成澤先生、前学長の小山先生などが所属しており、特に小山先生とは助手仲間・テニス仲間ということもあり度々ご一緒させていただきました。その小山先生が当時化学工学科助教授の高橋幸司先生と、若手教員の研究活動を活発化させるために学科の枠を超えた新しい研究組織として立ち上げたのが「山形大学リサーチネットワークシステム(Yamagata University Research Network System)」通称ヤーンズ(YURNS)です。私も上田先生が発起人の一人であったことからヤーンズの末席に加えていただきました。ここでの活動が、後の私の米沢での研究生活に大きな影響を与えることになりました。ヤーンズでは、小山先生や幸司先生と一緒に八幡

原の会社巡りや、年2回のヤーンズレポートの作成を手伝わせていただき、またこれらを通していくつかの共同研究も立ち上げさせていただきました。この共同研究に関して特にお世話になったのが、元工学部長で山形県テクノポリス財団理事長の鎌田先生です。鎌田先生は、工学部長退職後山形県テクノポリス財団理事長に就任され、山形市の工業技術センター隣に生物ラジカル研究所を設立されました。その発足の前段階から研究協力のお話があり、10年間程協力させていただきました。またそこでの成果を基に、当時工学部長の赤塚先生から、大学発のベンチャー企業を作ってはどうかというご提案をいただき組織されたのが、「スピンプローブ材料実用化プロジェクト」です。当時はまだ大学発のベンチャー企業は少なかった時代で、どう進めていけば良いのかわからなかったこともあり、赤塚先生の発案で、プロジェクトには合成部門に佐藤慎吾先生、製品評価担当に生物ラジカル研究所の青山先生、企業化のアドバイザーに当時山形県庁から出向されていた小野先生（現山形大教授）、さらに財務関連として米沢信用金庫の融資担当係の方に加わっていただきました。合成面ではどうにか青山先生に合格認定される製品ができたものの、コストと需要の面の問題解決ができず、残念ながら企業化は断念せざるを得なかったのが心残りでした。

また上田先生のご紹介で、米国シリコンバレーにあるIBMのアルマデン研究所のレジスト材料開発で有名な伊藤先生（後にIBMフェローに就任）のもとへ1年間の留学をさせていただきました。当時の研究所には、多くの国からたくさんの留学生が来られておりいろいろ交流させていただきました。私のいたグループには、帰国後の研究活動で大きなウェイトを占めた、ポリマーの精密合成法の一つであるSFRP法を開発したCraig Hawker博士（現UC Santa Barbara教授）などもおり、レジスト材料の最先端技術の世界を経験させていただきました。

帰国後、生体センシング機能工学専攻教授に就任されていた上田先生が東工大へ移られることになり、その後任として着任いたしました。センシングでの初期の研究は、生物ラジカル研究所との共同研究の継続である生物ラジカル検出材料の開発を札幌医科大学の藤井先生との共同研究で行いました。その後、バイオ化学工学科では田中先生（現九州大学教授）の抗血栓性材料開発に協力させていただきました。化学・バイオ工学科に改組されてからは、卒業生がお世話になっている縁もあり、新たに東北大学多元研の笠井教授とDDS材料の開発に主力を注ぎました。

今退職の時を迎え、私がどうかここまで来られたのは、多大なるご支援をいただきました親和会をはじめとする工学部の皆様、そして研究実験を黙々とこなしてくれた多くの学生さん達のおかげと大変感謝いたしております。特に学生さん達と

は、私が米沢に来た頃の頃は、山形県にコンビニエンスストア等がまだなく、正月になると一斉にお店が閉まってしまって修論作成時一緒にカップ麺などを啜っていたことを、この原稿を書いていて特に懐かしく思い起こしました。

最後になりましたが親和会の皆様方の今後益々のご活躍をお祈り申し上げます。  
ありがとうございました。





### 退職のお知らせ

技術部 統括技術長 大竹 哲也

国家公務員の段階的定年延長に追従して、山形大学も教員以外の職員定年が65歳まで段階的に延長となりました。私も61歳まで正職員として在職可能なのですが、諸事面倒事も多く、60歳でも定年扱いということでこれ幸いと退職することにいたしました。そうしたところ、親和会より「退職ついでに一筆なんか書け」との仰せ。こんなことなら黙って辞めれば良かったとも思ったのは置いておくとして、会心の出来事もこれと言ってなく、最近の出来事は記憶が曖昧なので、ご迷惑でしょうか どうでもいい昔話や雑感をいくつか。

私が文部技官として工学部に奉職したのは昭和57年4月、国家公務員試験（行政）資格を取り各省庁の出先機関の採用試験をいくつか受けましたか・・・。山形大学工学部の面接は3月3日と記憶しています。山形市から国鉄で50キロ、南下したのに山形市とは比べ物にならないほど雪が残っていて歩道の電信柱が1/3ほど埋没していたのを覚えています。旧化学工学科の先生方の面接を受けて採用となり、4月1日に着任して一号館に赴きましたが学会や春休みで誰もおらず、一週間ほど事務棟の庶務係で郵便の受付をしていました。この間にご挨拶できたのは一講座の今野先生と原田さん、四講座の真板さんだけだったような・・・。当時は今に比べて物事に万事余裕があり、化学系教職員の親睦行事として野球大会や芋煮会を平日の日中から行うこともありました。時間がゆっくり流れていて、皆和気あいあいといい時代だったと思います。

この頃の化学系の学科構成は一号館に化学工学科5講座、三号館に応用化学科5講座、二号館に物理化学講座、併設されていた米沢工業短期大学にも化学系2講座がありました。その後工業短大が工学部Bコースに改組され、学科の枠組みと名称も何度か変わっていき、私も化学工学科第四講座（プロセス制御）から始まり、第二講座（物質移動）の講座所属から、現在は工学部技術部所属、化学・バイオ工学科の宍戸研究室サポートという立場に変わりました。この期間に身につけた技術が私の財産になりましょうか。発表用スライド制作の一連の作業など今となっては不

要なものもありますが、機械工作、実験装置の組立、電子顕微鏡を始めとする分析機器に関するものは今でも飯の種となっています。

というわけで奉職以来42年にわたって技術に関した仕事をしてきました。この間パソコンの高性能化と小型化、インターネット網の普及は想像もつかなかったことで、高速交通網の整備とあいまって、より短い時間で仕事が片付き、遠いところに楽に移動できるようになりました。関東地方での学会などは新幹線で資料作成しつつ、用事が済んだらその日のうちに帰ることも可能になりました。そして余裕ができたかというとなんか変わらず時間に追われる日々で、技術の進歩とは昔の倍仕事しろということなんだろうかと思うこの頃です。

技術職員の労働環境もだいぶ変わりました。国立大学が法人化されたのと前後して講座に在籍していた技術職員の学部内組織化が行われ、組織ができるとそれに関する雑務が発生し、その結果これまでの研究室支援業務だけではなく学部執行部や教員および事務部との業務調整、技術職員のマネージメント、米沢キャンパスの安全衛生管理など、工学部運営に関わる業務が追加されました。さらに個人的なことですが、プラント実験棟や一号館の取り壊しに伴い身近にあった工作機械も機械工場に集約されてしまい、気軽にすぐ工作できる環境も無くなりました。年を経るにつれて会議とメールへの対応ばかり増えて、なんだか昔のほうが面白くて働きやすかったよなあというのは愚痴です。

定年後は地元の山形市でパートなどしつつ、降り掛かってくる雑事をこなしつつ、足腰健康に注意して晴耕雨読、できるだけ気楽に生活していくつもりです。最後になりましたが親和会のますますのご発展を祈りながら筆を置きます。





### ご退職に際して感謝申し上げます

理工学研究科 化学・バイオ工学分野

教授 木島 龍朗

佐藤力哉先生、長年にわたり工学部でのお勤め、本当にお疲れ様でした。力哉先生とは、同じ有機化学系の教員として講義や演習、実習といった数多くの場面において、そのほとんどは助けてもらいながら一緒に行動をとりにさせていただきました。これまで、たくさんのことを教えていただき、本当にありがとうございました。

力哉先生は、同じ筑波大学大学院出身の先輩だったこともあり、個人的にとっても頼りにしておりました。私が工学部に着任した頃（28年ぐらい前）は、高分子工学科にいらして、あまり接点はなかったと思うのですが、その後、生体センシング機能工学専攻に移ってからは、大学院入試の日程が本学科よりも遅かったこともあり、残念ながら努力が足らずに不合格になった学生を二次募集で拾っていただき、力哉先生の研究室で面倒を見て頂いたり大変お世話になったこと、数知れません。一緒に行動を共にする機会が増えたのは、生体センシング機能工学専攻が無くなって新たにバイオ化学工学科が立ち上がって、同じ学科の教員になってからでしょうか。学科の業務はローテーションで回ってることがほとんどで、力哉先生の後に私が担当するというシチュエーションが多かったと記憶しています。その度ごとに力哉先生からは多くの助言をいただき、大変楽をさせてもらったものです。そんな力哉先生からの頼みなので簡単には断れない私ですが、今でも忘れられないエピソードを最後に一つご披露させていただきます。

ある年の11月ぐらいの頃だったかと思います。研究室で実験をしていると電話が鳴り、出ると力哉先生からでした。

力哉先生：「ちょっと来てもらえない？」

木島：「はあ、大丈夫ですけど、すぐですか？」

力哉先生：「できれば今すぐ。」

何か嫌な予感はしました。「どこにですか？」と聞き返すと同じ建物の2階の会議室でした。力哉先生の居室は、自分と同じ建物ではなく、遠い9号館なので、なんでだろうと思いながら、会議室のドアを開けると、そこに居たのは、力哉先生の

他に当時、学科長だった多賀谷先生、それと知らない男女2名の大人の方が向かい合って座っていました。どうぞこちらにと着席を促された場所は、その4名から見て、良く言えば司会席、悪く言えば被告席のような位置です。

力哉先生：「木島先生、〇〇研の学生Aなのですが、先生のところ（研究室）を希望しています。受け入れてもらえますか？」

え～！先日、配属が決まったばかりだったんじゃないの？・・・。まだ1カ月もたっていないのに・・・。

木島：「即答ですか？」

力哉先生：「はい」

あの状況で断れると思いますか、力哉先生！ 知らない男女2名は、学生Aの御両親で、力哉先生は担任でした。

今となっては、いい思い出です。力哉先生、ありがとうございました。



## 新任教員のあいさつ



システム創成工学科

准教授 ガリボン ジョゼフィーヌ

あけましておめでとうございます。ガリボンと申します。

山形大学工学部システム創成工学科／理工学研究科化学・バイオ工学専攻に所属しており、2023年度に研究室を立上げました。場所は米沢キャンパス3号館2105・6号室です。現在は、博士後期課程の学生1名と学部3年生4名と共に新たなスタートを切ることができました。実は2015年10月より慶應義塾大学先端生命科学研究所の鶴岡キャンパスにいたため、山形県民になってから8年が経ちます。

ガリボン研究室では、分子生物学の基礎研究を基盤としながら、既存の手法で分析しにくい生命現象を分析可能にする技術開発に取り組んでいます。また、細胞が持つ遺伝子プログラムの表現型の範囲及び形態空間 (morphospace) と、細胞の自己組織化能力のメカニズムを解明することで、細胞を活用した新たなものづくり技術も提案したいと考えています。

学生時代の最初は医学部に入りましたが、病院のバイトで助からない患者を実践でみて、自分は医者道を歩みたいか悩んだ時期に、分子生物学の授業を担当する先生が講義中にあまりにも楽しそうだったため、思いっきり生命科学コースへ転入し、分子生物学を専門にした研究者を目指すことにしました。未だにその先生の授業が録音されたミニカセットを大切に保管しています。私もいずれか、誰かの人生をポジティブな方向に影響する授業を提供できるようになりたいと思います。

私の研究のスタートは、フランス国立衛生医学研究所のMarie-Claude Jaurand研究室で石綿の繊維が要因の一つである中皮腫といった、治療が存在しない癌の研究です。中皮腫の細胞が休眠状態になることで、細胞死を避けるメカニズムを当時の先輩と一緒に一部解明した (Daubriac et al. 2009)。その後、キュリー研究所のAlain Nicolas研究室で、乳がんのリスクを高める遺伝子の突然変異を判定する酵母のバイオセンサー開発に取り組むことで、バイオエンジニアリングの経験を詰めました。

博士課程は海外でとりたいたいという考えが学部時代の終わりごろからどんどん強ま

りました。母はアメリカ生まれカナダ人、父はチュニジア生まれフランス人のため、親戚が多い北アメリカやヨーロッパは「海外」と感じる事が難しかったこともあり、父が憧れだった「日本」以外の留学先は、あまり考えたことはありません。当時、自分の指導教員以外の学科の教員からは中々理解を得られませんでした。十何年後の現在は、私の母校の大学に科学と日本語のダブル専攻が存在するくらい、アジアが人気の留学先になっていると聞きます。

博士課程は、大使館推薦の国費留学生として東京大学大学院理学系研究科の生物化学専攻に進学することができて、太田邦史教授の元で細胞のストレス応答時に発現するRNAの転写後制御メカニズムを研究して、博士号をとりました。その後も2年半ほど東京大学に務めながら程久美子准教授の元でヒト細胞におけるRNA編集メカニズムの研究を行いました。DNAからRNAが転写されたあと、アデノシン(A)の塩基がイノシン(I)という別の塩基に編集されることがあり、また、それによって作られるタンパク質や制御される遺伝子が大きく影響を受けることがあるのです。日本RNA学会に12年所属しており、現在その役員です。

その次に務めた鶴岡の先端生命科学研究所は、研究の自由度が非常に高く、独特な環境です。当時の富田勝所長は、学生・教員問わず研究の方針は完全な自由を与えてくださいました。学生が地元の高校1年生または湘南藤沢キャンパス所属の学部1年生から鶴岡の研究室に配属することが可能であり、かつ、主体的に研究テーマを自ら提案する文化があります。「サメの流体力学」から「ウーパールーパーの睡眠研究」まで、私の専門領域から遠く離れたテーマに取り組む機会も、学生が頻繁に与えてくれました。自分のコンフォートゾーンから離れることは、指導する側として不安が多かったですが、学生と一緒に必要な予算や知識の取得を積み重ね、研究プロジェクトを本当の意味でゼロから立ち上げるプロセスを、各学生と一緒に体験することができて、自分も研究者・教育者として成長することができました。そしてそうするうちに、もっとも繋がりが深まったのは工学部であり、気付いたらほとんどの共同研究先が工学部になっていました。縁を感じて、次のポストは理工学・工学部を中心に応募しました。今の私が存在するのは、少し風変わりな若い学生たちがいてくれたおかげだと確信しています。

上記の経験を活かして、山形大学の学生たちや先生たちと、事務局にサポートされながら、新しい冒険に出かけられることを、楽しみにしております。

## 佐藤力哉准教授 退職のお知らせ

山形大学大学院理工学研究科准教授（化学・バイオ工学分野）佐藤力哉先生は、2024年3月31日をもって定年を迎えられます。

先生は1981年に東北大学理学部化学科卒業後、1986年3月に筑波大学化学研究科博士課程を修了され、1986年4月より本学工学部高分子化学科助手に着任されました。1987年3月に理学博士（筑波大）の学位を取得され、1998年4月に本学物質工学科助教授に昇任されました。その後、生体センシング機能工学専攻助教授、バイオ化学工学科准教授を経て2017年4月からは化学・バイオ工学科准教授として研究・教育活動に情熱を注いでこられました。

先生のご専門は有機化学と高分子化学であり、様々な有機機能材料の開発に取り組まれました。特に活性ラジカル種検出材料、抗血栓性材料、ドラッグデリバリーシステム材料の開発に力を注いでこられ、活性ラジカル検出材料の開発では、山形大学ベンチャー・ビジネス・ラボラトリー「スピンプローブ材料実用化プロジェクト」のプロジェクトリーダーなどを務められました。また学会でも、東北ポリマー懇話会山形地区幹事、日本接着学会東北支部幹事などを担当し、精力的に活動されました。先生は学内の活動のほか、子供発明クラブ指導員として子供達の指導や、南東北学生野球連盟理事として課外活動にも長きにわたり尽力されています。

先生のご退職にあたり、38年間にわたる研究・教育および本学への貢献に感謝申し上げますとともに、今後のご健康を祈念申し上げます。



## 大竹哲也統括技術長 退職のお知らせ

山形大学工学部技術部・統括技術長の大竹哲也さんは、2024年3月31日をもって定年を迎えられます。

大竹さんは、1982年に山形県立山形工業高校工業化学科を卒業され、卒業と同時に山形大学工学部化学工学科に文部技官として採用されました。

業務をこなす一方、1983年4月には、山形大学工学部B（夜間）コース応用化学科に入学、1987年3月に同学科を卒業されました。

さらに、2008年には博士（工学）の学位を取得されました。2022年には統括技術長に昇任され、42年にわたり本学での教育研究支援に力を注いでこられました。

研究室の支援業務に加え、学部執行部や教員および事務部との業務調整、技術職員のマネジメント、米沢キャンパスの安全衛生管理など、工学部運営に関わる業務もこなしてこられました。

大竹さんのご退職にあたり、これまでの教育研究支援および本学への貢献に対して感謝の意を表し、定年後ますますのご健康とご多幸をお祈りいたします。



2022年度（令和4年度） 親和会会計報告  
 (2022.4.1~2023.3.31)

2023年3月31日

	項 目	金 額	備 考
収入の部	前年度繰越金	2,544,851	
	郵便貯金利子	11	
	銀行貯金利子	17	
	入会金・終身会費(振替払込)	112,000	
	入会金(現金)卒業・修了時	43,000	
	終身会費(現金)卒業・修了時	177,000	
	運営会員年会費	46,000	
	合 計	2,922,879	

	項 目	金 額	備 考
支出の部	親和会賞(図書カード)	40,000	4名×10,000円
	親和会誌印刷および郵送代	1,251,580	
	振込手数料	880	
	その他	1,552	封筒およびクリアファイル
	合 計	1,294,012	

差し引き	収 入	支 出	残(次年度繰越金)
	2,922,879	1,294,012	1,628,867

	項 目	金 額	備 考
繰越金内訳	ゆうちょ銀行預金	608,897	
	ゆうちょ銀行定額貯金	0	
	ゆうちょ銀行振替口座	0	
	山形銀行普通預金	15,721	
	山形銀行定期預金	1,000,000	
	現金	4,249	
	合 計	1,628,867	

庶務・会計担当 鈴木 泰彦

水沼 里美

会計監事 伊藤 和明

このページには、個人情報が記載されていません。個人情報の保護のため、閲覧できません。

# 高原だより

## 高原だより

- 2023年4月 真壁 幸樹 准教授→教授（システム創成工学科）昇任  
2023年4月 ガリボン ジョゼフィーヌ（GALIPON, Joséphine）  
准教授（システム創成工学科） 着任  
2023年5月 藤原 翔 助教 転出（金沢大学）  
2024年3月 佐藤 力哉 准教授（バイオ化学工学コース）定年退職  
2024年3月 宍戸 昌広 准教授（応用化学・化学工学コース）早期退職  
2024年3月 大竹 哲也 技術専門員 定年退職

## 編集後記

本号では、今年度末で定年退職される佐藤力哉先生よりご挨拶をいただき、ご一緒のコースで業務に携わられてこられた木島龍朗先生よりご寄稿いただきました。また、宍戸昌広先生は今年度末に早期退職されます。同じく今年度で定年退職なされる技術職員の大竹哲也様からもご挨拶をいただきました。長年にわたり研究・教育に携わってこられ本年度で退職なされる皆様に心より深く感謝申し上げます。ガリボン ジョゼフィーヌ先生からは着任のご挨拶をご寄稿いただきました。今後益々のご活躍を祈念しております。



### 【表紙写真の説明】

旧本館（重要文化財）南側にあるケヤキ並木。2号館北側の改修工事の際に伐採予定でしたが、保存することとなり、歩行者専用道として整備されました。（撮影：米沢工業会 大沼正国氏）

この冬の米沢は雪がとてもなく、助かっております。しかし、2024年は能登半島地震、日航機衝突炎上と年始に大きな出来事があり落ち着いたスタートとなってしまいました。工学部での石川、富山、福井、新潟出身の学生の無事が確認され安堵しましたが、地震・津波による影響は大きく、被災された皆様のことを案じております。

2024年1月31日発行(非売品)

山形大学工学部 親和会  
発行者：遠藤 昌敏  
編集者：神戸 士郎  
黒谷 玲子  
樋口 健志  
右田 聖  
印刷所：(株)青葉堂印刷